

ロービジョンの認知—体験教室から学ぶ正しい配慮—

飯島那奈、内野裕陽、邵添滋、椰野一裕
(日本大学商学部秋川卓也研究室)

要旨

日本では約 164 万人いる視覚障害者のうち、約 90%をロービジョンの方が占めているとされている。しかし、小・中学校での障害理解教育において、ロービジョンを中心とした教育が行われていないこともあり、全盲に比べて認知がされていない現状にある。そのために適切な配慮に至らないことが問題視されている。本研究では問題解決のため、認知が広まっていない問題を分析し、改善策を提案して、実際に行った検証結果から改善策の有効性を論ずる。

キーワード:ロービジョン、認知の低さ、障害理解教育、体験教室、ロジスティック回帰分析

1. はじめに

ロービジョンとは見えづらい症状を有する視覚障害である。医学的には近視や乱視とは異なり、メガネでは矯正できない。視覚の症状例として、真ん中に黒い点がある、見える範囲が狭い、色が異なって見えるなどがある。

全国約 164 万人の視覚障害者のうち、約 90%をロービジョン者が占めている。しかしながら、全盲に比べて認知度が低い。私たちが独自に行ったアンケートでは、70%を超える人がロービジョンを知らない結果となった。

ロービジョンの方へのヒアリング調査から、「視覚障害者＝全盲」と捉えられることが多く、様々な場面で誤解を受け、心無い言葉をかけられるなど、不当な扱いを受けることがあることが分かった。例えば、電車で白杖を持った方が席を譲られた後にスマートフォンを操作して「見えるのに見えないふりをしている」と言われた体験談が新聞に掲載されている。この体験談のように、障害者であることが嘘と誤解されてしまうことがあるのである。これはロービジョンの認知の低さが原因である。

今後もロービジョン者は増え続けると考えられていることから、低い認知で誤解を受ける場面も増加していくことが予想される。全盲については小学生に対する障害理解教育で取り上げられているが、ロービジョンに対する教育機会は少ないことが分かった。東京パラリンピックも控えていることから認知が低い現状を看過できない。

2. 提案—体験学習の内容

ロービジョンの認知が低いことによって生じる課題を踏まえ、その解決策として「ロービジョン体験教室」を提案する。体験教室を行う意図は、①ロービジョンの認知を拡大させること、②声かけの仕方や誘導方法を正しく理解し、適切な配慮を身につけることの 2 点である。

体験教室を行うにあたり、社会福祉協議会や弱視者問題研究会に訪問し、ヒアリング調査を行った。その結果、認知の高い全盲の体験教室は行われているものの、ロービジョンを対象としたものは行われていないことが分かった。

こうした現状を踏まえ、私たちが提案する体験教室では、「見える」「見えない」という視点ではなく、これまで注目されていなかった「見えづらい」という視点を強調した。さらに、先行研究から、障害理解学習を行ううえで重要な以下の 3 点を配慮した。

- ① 事前学習: 予備知識を学ぶことによって、その後の学習をより効果的に行うことができる。
- ② 擬似体験: 体験をすることによって、心情の理解につながり、座学では学ぶことができない実践力の向上につなげる。
- ③ 事後学習: 体験後に感想を言葉にすることによって学習内容の確実な定着につながり、学びを深めることができる。

したがって、体験教室のプロセスは、①事前学習で見え方や誘導方法を説明する、②擬似体験として白杖とロービジョン体験メガネを使用して歩行・誘導体験を行う、③事後学習では体験者に質問を行い、体験内容を実生活にあてはめて応用できるかを確認する、となった。核となる②は、体験者はロービジョン役と誘導者役に分かれ、前者はロービジョンの視覚を再現した体験メガネと白杖を用いて点字ブロックを敷いた独自のコース上を歩行し、後者がその誘導を行うという、相互体験学習を意図する。対象は小学生とした。その理由としては、ロービジョンを対象とした障害者教育がなされていない点、他の年代よりも吸収力がある点、家族への波及効果を見込める点がある。



図1 事前学習の様子

3. 有効性の実証

3. 1 実証内容とその結果

考案するロービジョン体験教室の有効性を検証した。東京都内の下記の10カ所の小学校学童(実施順)に通う小学生を対象として実証調査を行った(図1)。

- ・ 世田谷区 A 学童
- ・ 調布市 B 学童
- ・ 狛江市 C 学童
- ・ 狛江市 D 学童
- ・ 狛江市 E 学童
- ・ 世田谷区 F 学童
- ・ 狛江市 G 学童
- ・ 世田谷区 H 学童
- ・ 狛江市 I 学童
- ・ 江東区 J 学童

すべての体験者に対し、終了後に「町で目の不自由な人が困っていたら声をかけますか」という質問を行った。体験学習ごとに、「はい」の回答割合(以下、回答割合)を算出した。

最初に A 学童と B 学童で行った。親しみを持ってもらえるように目の研究所の先生に扮した。事後学習では、「町中ではどんな手助けが大切か」の質問には「小さい文字を代わりに読んで教える」や「階段を誘導するときは何段あるかを伝える」などの回答があった。体験者が学習内容を実生活にあてはめることができているといえよう。さらに、後日体験者の保護者に行ったアンケートにおいて「お子様から聞いて初めて知ったことはありますか」の質問に対して、「ロービジョンの症状を初めて知った」や「視覚障害の方の誘導方法を知った」などの回答が得られた。家族への波及効果も確認できた。

しかし、先に示した声かえの回答割合は、世田谷区 A 学童が 58%、調布市 B 学童が 53%と低い結果となってしまった。反省を行った結果、以下を問題点と考えた。

- ① 児童はどんな手助けをすべきか迷っている
- ② 誘導に自信がない
- ③ 声かけを断られることは恥ずかしいと思っている

以上の問題を踏まえ、以下の内容改善を行うこととした(第1の改善)。

ユニバーサルマナー検定の受講経験から、障害のある方が必要としていることは声かけをしてみないと分からないことが分かった。それを踏まえ、①については「必要としていることは声をかけて初めて知る」、②については「どのような誘導が適切かを相手に聞く」ということを強調するという改善を行った。さらに、ロービジョンの方へのヒアリングから「できることは断ることもあるが、声かけをしてくれるのは嬉しい」という声があった。このことから③の改善として「声かけをロービジョンの方は迷惑だと思っていない」ということを教えることにした。

第1の改善を施した体験教室を C 学童で実施をした。回答割合は 78%に増加した。よって、改善は効果的であったと考えられる。しかし、反省を行ったところ、ロービジョンを他人事に捉えている体験者がいることが問題視された。そのため、第2の改善を行うこととした。事前学習で日常生活での問題や町中で困っていることを写真で説明することで体験者が自分事として捉えやすくする工夫を追加した。

第2の改善を施した内容で D 学童で実施したところ回答割合が90%となった。その後、6つの学童でも同様の内容で実施をした。各回答割合の結果は以下のとおりである。

- ・ 狛江市 E 学童 96%
- ・ 世田谷区 F 学童 100%
- ・ 狛江市 G 学童 100%
- ・ 世田谷区 H 学童 90%
- ・ 狛江市 I 学童 92%

このように、回答割合が 90%以上に安定してきた。続いて J 学童でも実施をした。しかし、結果は今までの割合を下回る 79%であった。この低下原因を探るため、第3の改善を行った。擬似体験の際に恥ずかしさを感じている生徒が多くいた。恥ずかしさを取り除くために、他の児童から見えない

場所で疑似体験を行うことにした。第 3 の改善を踏まえ、再度 J 学童で前回未体験の児童に対して実施をしたところ、回答割合が 86%に回復をした。このことから雰囲気対策も必要であることが分かった。さらに、回答割合の低かった B 学童で前回未体験の児童に対して再度実施をした。その結果、回答割合が前回の 53%を大きく上回る 87%になった。

約 9 割の児童から安定して声かけの意思を確認できたことから、体験教室が有効的であると結論付けたい。

3.2 改善の統計的検証

学童間によって教育内容と体験者属性の相違があることを考慮したうえで、どの改善効果が有効であったかを統計的に検証した。分析には統計ソフト R (ver. 3.5.1) を使用した。データは体験者(小学生) 206 名を使用する。

・被説明変数:

「町で目の不自由な人が困っていたら声をかけますか」という問いに対する正否回答(二値変数)

・説明変数:

- X1 : 第 1 の改善ダミー(二値変数)
- X2 : 第 2 の改善ダミー(二値変数)
- X3 : 第 3 の改善ダミー(二値変数)
- X4 : 体験者の学年
- X5 : 性別ダミー(二値変数)
- X6 : 体験者数
- X7 : 経験効果(累積実施回数)

注: X4-X7 は統制変数

表 1 ロジスティック回帰分析の結果

Coefficients:				
	Estimate	Std. Error	z value	Pr(> z)
(Intercept)	0.300803	1.244918	0.242	0.80907
X1	1.322864	0.639352	2.069	0.03854 *
X2	2.353461	1.053989	2.233	0.02557 *
X3	0.517207	0.783220	0.660	0.50902
X4	-0.126785	0.165937	-0.764	0.44483
X5	1.072458	0.387040	2.771	0.00559 *
X6	-0.004678	0.048982	-0.100	0.92068
X7	-0.232888	0.156085	-1.492	0.13568

 Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1

Cox.Snell	Nagelkerke	AIC
0.16985454	0.26934998	199.81221423

ロジスティック回帰分析の結果(表1)として、X1 と X2 に正の有意性があることが分かった。このことから、第 1 と第 2 の改善が有効であることが確認された。

4. まとめ

ロービジョンの認知をあげ、適切な配慮につなげるため、独自に作成したマニュアルを用いて体験教室の実証を行ってきた。その結果、効果の存在を確認できた。体験後に、「町で目の不自由な人を見かけたら声をかけたい」「お手伝いできることがあれば進んで手伝いたい」といった感想を多く聞くこともできた。体験教室を通じて得られた知識が広がれば、ロービジョンに配慮した社会形成に貢献できよう。

ロービジョンの人口は今後も増え続けることが予測されている。しかし、認知と理解が少ないために、当事者の方が不当な扱いを受け、肩身の狭い思いを強いられている現状がある。近年の日本では、施設入口のスロープ設置、視覚障害者誘導用ブロックの設置など、ハード面でのバリアフリーが進められている。しかし、それだけでなく、人々の行動や配慮といったソフト面においてもバリアフリーを進めていく必要がある。私たちの考案した体験教室がバリアフリー推進の一助になっていることを切に願う。

謝辞

本稿作成において多くの方にご協力いただきました。訪問調査やアンケート等にご協力くださった皆様にこの場を借りて心より感謝申し上げます。

【参考論文】

[書籍]

[1]井門正美(2002)「社会科における役割体験学習論の構想」NSK 出版

[論文]

- [2] 柏崎秀子[2014]「体験活動に向けた主体的な事前学習の開発とその効果-介護等体験の単位化」実践女子大学文学部紀要(56),31-41
- [3] 中原淳[2013]「経験学習の理論的系譜と研究動向」、日本労働研究雑誌 2013 年 10 月号、労働政策研究、研修機構
- [4] 三浦和尚[2009]「ことばの学び 第 19 号」三省堂国語教育 2009/5/14 発行 4-7
- [5] 篠ヶ谷圭太[2012]「学習方略研究の展開と展望」教育心理学研究 第 60 巻第 1 号,92-94
- [6] 久保山茂樹[2006]「通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための教材と学

習プログラムの開発」国立特殊教育総合研究所教育支援研究部,3-10

- [7]真野清佳 戸城匡宏 中村桂子 稲泉令巳子 他[2013]「ロービジョンエイドとしての携帯電話の利用状況」日本視能矯正学会,137-145
- [8]藤咲淳一 幸田るみ子 中里克治[2014]「視覚障害者が白杖を使用することの心理的困難さに関する研究」東京福祉大学・大学院紀要 第4巻第2号,105-114
- [9]今枝史雄 西山寛弥 金森裕治[2014]「私立の小・中学校における障害理解教育の実態に関する研究」大阪教育紀要 第IV部門第63巻 65-80
- [10]西館有沙 水野智美 徳田克己[2016]「地域で実施されている福祉体験講座の問題点と改善策の提案」障害理解研究(17) 1-16

[一般雑誌・新聞記事]

- [11]「『白杖＝全盲とは限りません』弱視の人ら、誤解解消へグッズ」朝日新聞 2016年11月22日 朝刊, 38面

[ウェブ]

- [12]内閣府[2013]『障害を理由とする差別の解消の推進』内閣府ホームページ, <http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/sabekai.html>, 2017年10月3日アクセス